

発表題目 情報様相と現象的意識

八木 厚夫 (YAGI ATSUO)

エッセイスト

要旨

「精神が身体に宿る」とはどのようなことか。この古くからの問いは神経科学や認知科学、人工知能 (AI) 技術が急速に進展しつつある現代においても「物質に過ぎない脳と身体システムの意識が生じる」とはどのようなことか、という難問として哲学者や科学者たちの関心を集めている。

現象としての意識 (phenomenal consciousness) と物質 (matter) との間の説明ギャップを存在ギャップ (ontological gap) として捉える立場、たとえばデカルトの実体二元論によれば、精神と物質は独立した存在だが、それらは相互作用する。この相互作用について、近年の見解としてマイクロ物理学は因果的に閉じていないとする相互作用説 (psycho-physical interactionism) が知られる。

本報告では、意識と物質の説明ギャップを存在ギャップとして捉えた上で、それを静的な二元論ではなく時間を含む動的な存在論的カテゴリの枠組みから考察する。考察の前提は次の通り ; (i) 現象としての意識には起源があり、それは生起する存在である。(ii) 意識と物質は独立した存在であり、意識の生起後にそれが物質と相互作用することはない。(iii) 生起する意識の内容に志向性を与える働きは生起作用そのものにある。

以上の前提に基づいて本報告では、認識主体が自ら形成し消費 (利用) する志向的情報 (intentional information) の表現形式 (情報様相 information modal) が「様相転移 modal transition」し、現象的意識が生起 (occasion) するというモデルを検討する。様相転移によって志向的情報の様相は変化するが志向的内容は引き継がれ、意識内容に志向性を与える。このモデルによれば現象的意識は受動的なもので、物質的世界における認識機能に能動的効力を及ぼさない、すなわち思考と行為の認識論的主体である「私」に帰属する心的態度 (信念や欲求など) とは係わりを持たない。

様相転移は既知の物理法則の範疇にない仮説であり、それを検証する術がない。しかし意識は疑い得ない経験的事実であることから、この自然界には意識と物理的な事実を媒介する何らかの法則的 (law-like) なしくみが存在すると考えることは不自然ではあるまい。そのような思考可能 (conceivable) な媒介モデル候補のひとつとして様相転移を位置づけることができるだろう。

以上